

「人」を通したまちづくり

八王子市学校教育部長 野村 みゆき

はじめに

私は、1978（昭和 53）年の入庁で市役所には 36 年お世話になり、その間、たくさんの先輩と同僚に恵まれた。

当時は、国連で女性の地位向上に関しての取り組み（国連婦人の 10 年）が始まったばかりで、日本では学校を卒業した女性の多くが就職はするものの、その地位は男性の補助的役割が求められており、多くの女性はそれに疑問を持っていなかった時代であった。また、「寿退社」という言葉があり、女性は結婚・出産を機に退職して家庭に入ることが幸せであるということに世間一般では肯定的な時代であった。私の母は、保健師の資格で公務員として働いていて、自分も一生働くことができる職場を目指そうと考えていた。

入庁した市役所においても、当時はお茶入れやお弁当注文は女性職員の「仕事」として受け止められていた。その後、「男女雇用機会均等法」の制定など時代が進み、私自身結婚し、妊娠した頃にはお茶入れなどに時間を割かれることもなくなり、女性職員の権利を主張する運動も経験し、「育児休業法」成立への国の流れから、二人の息子のために育児休暇も取得できた。

現状では、市役所の男女の採用比率は男女 1 対 1 と聞いている。市民の男女比も概ね 1 対 1 であり、職員一人ひとりの意見と能力が市民の福祉向上に、そのままつながっていくことを期待している。



八王子市立第2中学校昇降口にて

「人」から学んだまちづくり

まちづくりを題材に私の市役所での職歴を考えると、窓口を通して多くの市民に出会いながら、市民の求めるまちを、と考えるようになったと言える。

入庁して 2 番目の職場は建設部管理課住宅係（以下、職場名は当時）であった。市営住宅の使用料を担当し滞納整理も行っていた。そこで出会った市民は、一人暮らしの高齢者、家計が厳しい母子、離婚後引きこもりになってしまった男性、障害を持った子どもの育児に疲れている母親などさまざまであった。窓口に来て話すことは、時に生活の苦しさであったり、時に家族の悩みであったり、時に使用料の滞納のこともあった。私の選んだ仕事（市役所の仕事）は、人と接することで、その人々の暮らしを作ったり、守ったり、価値あるものとしていける、そ

ういう仕事であると、初めて実感できた職場であった。

清掃部リサイクル推進課に異動となったのは、紙の分別が始まった時であり、ここである市民グループに出会った。彼女たちは、生活の中から出る廃棄物をリサイクルする行政責任を訴え、同時に自らの活動として牛乳パックの回収や缶の回収を地道に行っていた。その後、順次市は資源のリサイクルを進めていく中、その工程で、これらのグループと何度も話し合い、リサイクル業者へも一緒に行ったりした。最後に、このグループは、「私たちは、八王子がこういうまちであつたらいいなと思ってやってきました。市役所が次々取り組んでくれて、残るは生ごみと思っています。いつかは実現させてください。」と言っていた。まだ市民協働という言葉はなかった時代であつたが、市民が求めているまちを着実に実現できるのは、行政であると教えられた。この頃から、市民の皆さんと話し合って仕事を進めるというやり方が自分に合っているなど感じていた。

福祉部高齢者福祉課に異動したのは、介護保険移行直前で措置制度を動かしながら新たな制度への準備をしていた頃であつた。措置のサービスを受けていた人を、契約に基づく介護サービスへ着実に移行させなくてはならない。その対象者はお年寄りで、この大きな制度移行を本当に理解してくれているのだろうか、中には一人暮らしの方もいて 2000（平成 12）年 4 月 1 日に誰もが今までどおりのサービスを受けられるか本当に心配であつた。ここでも、いくつもの市民グループや人に出会った。高齢者などに食事を届けるボランティアをしている人たち。介護保険を受けるまでもないが一人暮らしで外出が少ない高齢者や少し認知が見られる高齢者を集めて、デイサービスを自主的に行っている人。これらの人たちは、自分たちが年をとったとき、八王子がこういうまちであつたらいいな、と思って市のサービスが行き届かない部分を、自分自身で埋めてより住みやすいまちにしようという人たちであつた。

その時、その部署で与えられた業務をこなしながらも、「こういう八王子がいいな」ということを、多くの「人」に教えられてきた。お給料をいただきながら多くのことを教えていただいた思いである。

おわりに

そして、最後に与えていただいたポジションは学校教育部長である。八王子の未来を作っていく人材を生み出す仕事であり、究極の「人」を通したまちづくりと思っている。子どもたちには、限らない未来を開く力と希望に満ちた明日を感じさせる力がある。子どもたちを見ていると、こんなに幸せな職場はないといつも感じさせてくれる。同時に、とても責任が重い職場でもある。学校という場所は、子どもたちが安心して学ぶことができ、一人ひとりが可能性を発見できてやりたいことに挑戦できる、そういう場所でなければならない。たくさんのことを学んで、しっかり学力をつけてほしい。一人ひとりの可能性を全部引き出せる教育をしたい。自分の得意なことを見つけ挑戦してほしい。一生信じあえる仲間を作り、生きる礎となるふるさと感じてほしい。

最後に与えられた仕事の成果は、将来の八王子を力強く支えてくれると信じている。

（のむら みゆき）